

# 祠廟の記録に見える近世中国の「鎮」社会

## —— 南宋期の南潯鎮の事例を中心に ——

須 江 隆

### 要 旨

人々が寄り集まって生活する場が新たに形成されれば、そこが大都市であれ地方の集落であれ、何らかの秩序が必要不可欠である。宋代以降の中国社会は、都市化の進展により、地方都市「鎮」、すなわち交通上の要衝にできた自然発生的集落・地方の小都市が著しく発展するとともに、儒教的イデオロギーが強化され、地方社会の深部にまで浸透し、科挙の受験者・科挙の学位を有するもの・退官して帰郷したかつての科挙官僚たちが、地域社会のリーダーとして認知されていったことを一大特色としている。こうした新たな社会現象が現れる画期となった宋代において、地域社会のリーダーは、「鎮」社会において、どのような自律的秩序を形成しようとしたのであろうか。

この論文では、前近代中国において、地域住民の最も身近な信仰の場であり、地域結合のアイデンティティ形成の上で核心的役割を果たしていた祠廟に主として着目し、碑文を中心としたそれに関する記録を分析することを通して、祠廟から見た「鎮」社会の秩序を解明したい。なおこの論文だけで、すべての「鎮」について考察を行うことは不可能である。そこで、特に本稿では、現存し、かつ南宋時代にルーツをもつ、先進地帯の典型的な古鎮である南潯鎮の形成期を中心に取り上げて、分析を加えることにしたい。

キーワード：「鎮」社会、地域エリート、秩序、祠廟の記録、近世中国

### はじめに

人々が寄り集まって生活する場が新たに形成されれば、そこが大都市であれ、地方の集落であれ、何らかの秩序が必要不可欠である。宋代以降の中国社会は、都市化の進展により、地方都市「鎮」が著しく発展するとともに、儒教的イデオロギーが強化され、地域社会の深部にまで浸透し、科挙の受験者・科挙の学位を有するもの・退官して帰郷したかつての科挙官僚たちが、地域社会のリーダーとして認知されていったことを一大特色としている。こうした新たな社会現象が現れる画期となった宋代において、

地域社会のリーダーは、「鎮」社会において何故リーダーたりえたのか、またどのような自律的秩序を形成しようとしたのであろうか。本稿では、「鎮」レベルの地方志に見える叙述や祠廟に関する記録を分析することを通して、「鎮」社会の実態や祠廟から見た「鎮」社会の秩序を解明したい。なお本稿において、すべての「鎮」に亘って考察を行うことは到底不可能である。そこで本稿では、ケース・スタディーとして、特に現在の浙江省湖州市の東部に位置する南潯鎮の形成期を中心に取り上げて、分析を加えることにしたい。

ところで、中国における「鎮」とは、交通上

の要衝にできた自然発生的集落・地方の小都市のことで、地方の物資の集散所・交易所、地方経済の動脈としての機能を担っていた。従って、物資集散の利益が集中する場であるが故に、宋代において「鎮」は、宋王朝より監鎮官が派遣されて税の徴収が行われるなど、中央政府にとってもその重要度が増していった。嘗て斯波義信氏は、宋代から清代の都市史について、鎮市の成長・普及を一大特色としている点に言及し、伝統的な県城と新興の郷鎮という視点から中国都市史を理解することの有効性を説いている<sup>1)</sup>。このように、少なくとも宋代以降において、人民の最も身近な日常生活の場が「鎮」であるとしたならば、中国社会の独自性を解明する上でそこへの着眼は必要不可欠であろう。また、現在の中国に残る先進地帯の古鎮のルーツは、南宋時代にまでさかのぼることができるが、明代に浙西随一の桑の葉の集散地、生糸・木綿の搬出地として著名となった烏青鎮(湖州)や、養蚕・絹織物業の名だたる町として台頭していった南潯鎮(湖州)・盛沢鎮(蘇州)がその代表的存在ともいえる。つまり南潯鎮は、宋代より以降に存在する典型的な古鎮であり、長い近世中国社会を目撃してきた証人とも言える。この論文で「鎮」社会に、そして敢えて南潯鎮に注目するのは、以上のような理由によるものである。

一方、本稿で「鎮」社会の秩序を解明するにあたり、祠廟に着目するのは、祠廟が長い間中国社会において地域住民の最も身近な信仰の場であり、地域住民を文化的・精神的に統合するという機能を果たしつつけてきた施設だからである。筆者はこれまで、この祠廟という素材に注目し、唐中期から南宋期の王朝権力と地域社会の連関構造に関する研究を進めてきたが、その際、主たる史料として用いた祠廟の記録は、以下の3種に分類される。

- ①『宋会要輯稿』礼20-1～礼21-64「諸祠廟」：宋王朝の祠廟制に関する記述と賜額・賜号に関するデータを所収
- ②地方志の「祠祀」「祠廟」などの項目に見える記録：ある一つの地域に存在する祠廟の名称、祀神、建置の経緯、重修・再建・損壊の沿革、祀神の靈驗、賜額・賜号の歴史

などの内容を所収

- ③石刻史料—「廟牒」と「廟記」—：祠廟の記録の中で、現代の我々に祠廟に関する最も具体的な情報を提供してくれる石に刻まれた碑文史料で、北宋末期から南宋時代に碑刻されたものが多い

「廟牒」：王朝側の論理が反映している公文書を刻んだ史料で、賜額・賜号の経緯を記述したもの

「廟記」：祠廟の建立や再建の顛末、祭祀儀礼、靈驗などを書き記したもので、撰者や内容、書き方のスタイルは、多種多様だが、地域の論理が反映しているものが多い

本稿が分析の対象とする「祠廟の記録」というのは、主として上記の③を指している。

なお、筆者が本稿で強調したい要点は、次の三点に集約される。第一に、南宋時代に形成された「鎮」社会におけるリーダーは、州城・県城に居住したエリートたちと些か異なり、科挙及第者・仕官者の永続的輩出によってというよりはむしろ、父老層を中心として祠廟・寺院・橋梁などの地元の建造物への介入・維持・財源面での貢献、人民の教化・指導によって、リーダーたる資格が現地住民により付与されていた。第二に、彼らが介入し維持に貢献した祠廟では、その地域独自の伝承や説話に基づく神々にまつわる言説が形成され、それへの信仰が「鎮」社会の人々の文化的・精神的統一原理となっていた。第三に、宋王朝は、このように成熟した「鎮」社会をコントロールせざるを得なくなり、「鎮」社会の祠廟で祀られる神々で、儒教的統治理念にかなったものを土神と規定し、賜額・賜号を通じて人々の心性をも統制しようとした。一方「鎮」社会のリーダーたちは、こうした宋王朝の現実的政策選択を歓迎し、体制教学を利用して賜額・賜号に備えて、加えて「鎮」社会の新たな秩序を形成するために、神々の表象をそれに沿うように改変乃至は作為していった。以上の三点を論じるにあたり、まずは、南潯鎮とその歴史、及び南潯鎮創設期のリーダーたちについて言及することにしたい。

## 1. 南潯鎮と「鎮」創設期のリーダー

### (1) 南潯鎮とその歴史

南潯鎮は、現在、浙江省湖州市に所属し、湖州市の東30km・蘇州市の南60kmに位置する水郷都市である。そこは、太湖周辺のクリーク地帯にあたり、呉興運河が「鎮」の北端を通るといえる、まさしく水路ネットワーク上の要衝といえることができる（後掲の地図1を参照）。面積は244ヘクタールで、人口は、清末で42,408人（鎮区：17,750人、郷下：24,658人）、1949年当時で26,409人（鎮区：10,375人、郷下：16,034人）といわれている<sup>2)</sup>。民国時代においては、大規模な生糸問屋が3軒、製糸工場が2つ、金融業者の店舗が3軒、商店が830にのぼるといえる、生糸の一大集散地であり、南潯鎮を経由して、水路を利用した定期船が周辺の「鎮」や農村、蘇州・湖州・上海といった巨大消費都市に運航していた。

このように経済的に活況を呈していた南潯鎮も、元々、北宋時代の政和年間（1111~1118）に潯溪土橋（後の通津橋）が建設された頃には、数十家の戸を擁する集落にすぎなかった。宋王朝の臨安府への遷都にともない、北方の官僚や富室が南遷すると、それと相前後して、この地に移住する有力姓氏があらわれ、鎮南の南林村と鎮北の潯溪村を形成するにいたった。具体的な有力姓氏としては、北宋末期に潯溪に居住したとされる朱氏（始遷祖・朱仁福？：陝西・涇陽の人）、北宋政和年間に海州より移入した董氏（始遷祖・董貞元：海州より烏程県梅林に移入、後、南潯に定居）、南宋時代に無錫より南林に移入した華氏（始遷祖・華天保）をあげることができる。端平元年（1234）の記銘がある「南林報国寺碑」には、すでに「農業と養蚕による富は浙江北部では一番であり、土壌が潤い、物が豊かで、民は誠実で人口も多く、坐商・行商人の拠点となっている」という記述が見られる<sup>3)</sup>ので、南宋時代には養蚕・植桑・製糸業が発達し、蘇州・嘉興の境界に位置する地方都市として、浙江北部の商業活動の中心地となっていたことが分かる。こうした発展により、官府は淳祐11乃至は12年（1251乃至は1252）に、南林・潯溪両村を合併して南潯鎮を設立した。

「鎮」草創期は、運河南側の土地堂（後の嘉応廟）のある一帯が中心地で、そこで市場が開設され、交易や集会活動が行われていたようである（後掲の地図2を参照）。

その後、南潯鎮は、元末にモンゴルの支配に反旗を翻して「鎮」の周囲に城壁を建設し、「鎮」の中心が十字形の運河沿いに移行した。明代の初期に13年間に亘り築かれていた城壁が撤去されると、防御施設としての4つの水門が各運河の東西南北の出入りに設置され、運河沿いに商業区を形成するようになる。16世紀中頃には、生糸の市がたち、運河や堤防の整備が進展し、益々人々の往来が盛んとなり、商業鎮として最盛期をむかえるにいたった。さらに明末になると、「鎮」の東北部に位置する「百間楼」に、富豪や退官した官僚層が集住するようになり、清代には、商業区が南北に拡大され、人家は一万余を数え、南潯シルクを求める商人たちが雲集し、各種の会館も複数建設された。以上が南潯鎮の歴史の概略であるが、「鎮」草創期のこの地の指導層（リーダー）は、どのような人々であったのであろうか。次に、当地の有力姓氏を中心とした考察を深めていきたい。

### (2) 南潯鎮の指導層（リーダー）

南潯鎮の草創期のリーダーを考察するにあたり、先ずどのような当地の一族が科挙及第や仕官を果たしたのかを検討してみたい。次の表は、同治『南潯鎮志』巻17の「選挙」に見られる記述により、複数の仕官者を出した張氏・董氏・朱氏・華氏の、宋代から清代までの動向をまとめたものである。なお、薦挙等の制度は、宋・元・明・清の各時代において異なるものなので、一括りにすることには問題があるかもしれないが、同治『南潯鎮志』巻17の「選挙」での記述の分類に従って表を作成した。

進士

	張氏	董氏	朱氏	華氏
宋	1		1	
元				
明	2	4	1	1
清	1	1		

薦挙等による仕官

	張氏	董氏	朱氏	華氏
宋	1		2	4
元	2			
明	5	4	1	3
清	3	15	1	

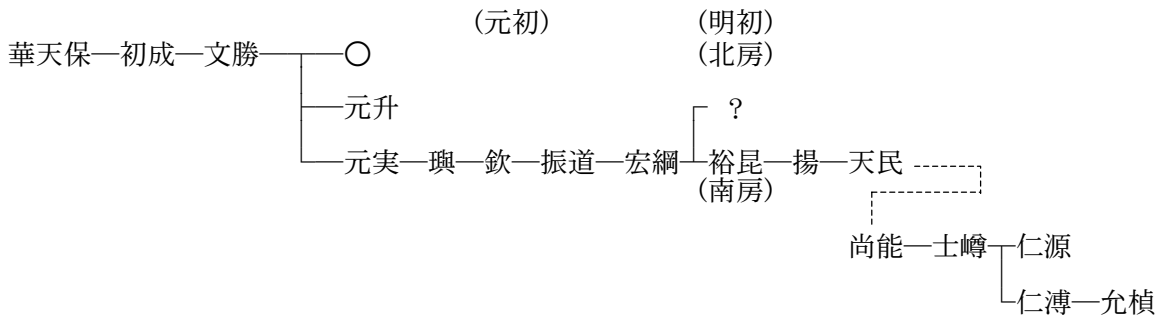
挙人

	張氏	董氏	朱氏	華氏
宋				
元				
明	5	6	1	1
清	6	17		

この表によると、明清時代は圧倒的に董氏・張氏が優勢で、華氏・朱氏は宋から清までを通じて科挙及第者や仕官者を決して永続的に輩出しているわけではないことに気が付く。ところが、現地への貢献という観点からすればむしろ、華氏や朱氏一族の方に目立った活動を指摘することが出来る。そこで次に、華氏一族と朱氏一族の具体的な現地との関わりについて言及することにしたい(以下で述べる建造物の位置や地名については後掲の地図2を参照)。

華氏一族の系譜は、下に示す<華氏系譜>の通りである。この一族は、南宋時代に始遷祖の華天保が無錫より南林に移入したところから系

<華氏系譜>



譜がはじまるが、当地の地主・富戸であり、代々父老を務めたりしていたようである。華天保の孫の華文勝は、私財を提供して地元にあった報国寺(開禧年間(1205~1207)に宗偉和尚が創建)の鐘楼や仏閣を建造したり、嘉熙年間(1237~1240)には通利橋という石梁を架けたりした。そうした行いをしたために、文勝は居民からありがたがられ、その橋が華家橋と呼ばれるようになり、彼らが居住していた鎮内の区画も華家とう兜(巷)と名付けられたという<sup>4)</sup>。ちなみに嘉熙元年(1237)2月の記銘のある「報国寺布施記碑」(同治『南潯鎮志』巻26, 碑刻2)によると、この時華文勝は、総額で4,550貫文の寄付をしている。当時の最下級士大夫の一か月の生活費は約100貫であったといわれている<sup>5)</sup>ので、寄付の総額がいかに巨額であったかが分かる。なお、この報国寺については、南宋時代における檀家の寄進記録が石刻史料でいくつか残されており、潯溪の朱氏や張氏に列なるものなどの姓名を確認することができる<sup>6)</sup>。つまりこの寺は、南林村周辺に住む複数の一族の檀家によって維持されていたようであるが、華氏集住の場所に近いこともあり、華氏の財力を背景として、その一族の貢献度が最も大きかったのであろう。また、華文勝の子、華元実には「七巷社主・七巷父老(祭祀共同体の長)」の肩書きがあり、本稿の第2節でも詳しく述べるように、「鎮」の中心的存在として人民に親しまれていた土地堂に対して、宋王朝から咸淳6年(1270)に「嘉応」の廟額が下賜されるのに深く関与していた<sup>7)</sup>。また彼には、

景定四年(1263)に、時の宰相、賈似道が公田法(政府が田を買い上げて軍費を賄う法)

を実施し、浙西で田地を買い上げようとした折に、安価な錢貨や銀、絹、あるいは度牒や告身を代価として、ほとんど没収同然であったため、浙西路の六府州軍では、破産したり失業したりするものが大量に出た。この時華元実は、嘆息して田産の半分を政府に献納している。賈似道はその見返りとして、元実を著作郎に取り上げようとしたが、元実は辞して受けず、それ以来、彼は門戸を閉ざし、監鎮官が彼の元の所有地に建物を造る度に目通りを願ってきたが、会うことはなかった<sup>9)</sup>。

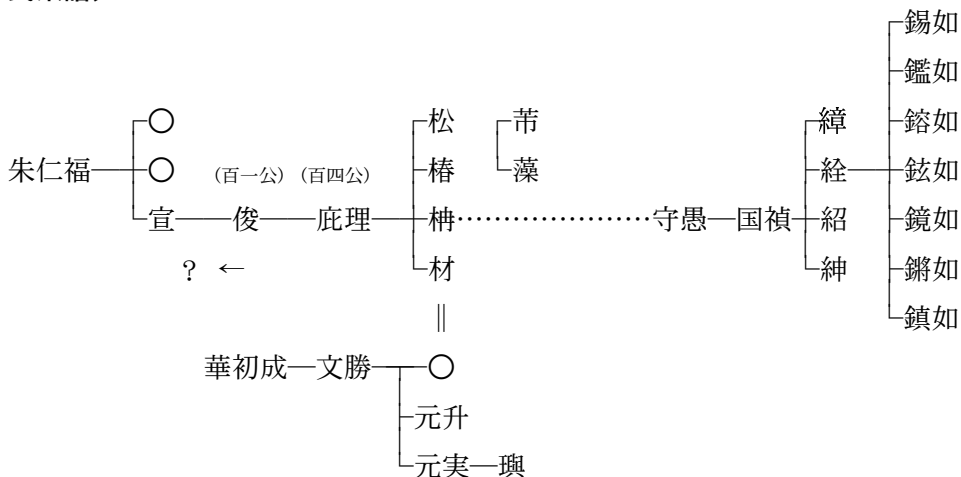
というエピソードもあり、監鎮官が一目置く存在でもあった。

さらにまた、同治『南潯鎮志』巻12、人物1にみられるその子孫たちの伝記によると、彼らも地域に尽力したり、人民教化や盗賊の侵入を防いだりするのに功績をあげている。例えば、元実の子である華璵は、経界推排法(土地を測量し図を描いて帳簿を作り税と役を定める法)の緩和を知州に要求している。さらに華璵の子、華欽は元初に官僚引退後、南潯鎮に帰郷し、社会学長とともに人民の優れた者たちを集めて講学し、南陽先生と称せられた。その後華氏は、華宏綱の時に、彼の父である振道が潯北の彩虹橋付近に築いた別荘地「曉山園」を長子に、自ら石澗の北に築園した「小桃源(華園)」を次子・裕昆に相続させたため、これ以降、華氏に南北房の称があらわれる。南房の華裕昆(?~1393)には、元末の張士誠の割拠による盗賊の発生に

際して、住民を束ね、華園を砦として防御し、侵入を防いだというエピソードがある。明末には、華士嶠がこの一族としては初めて、万暦29年(1601)年に科挙の進士に及第している。

一方、潯溪村を拠点としていた朱氏一族の系譜は、下に示す<朱氏系譜>の通りであり、華氏とも婚姻関係を結んでいた。この一族は、北宋末期の宣和年間に方臘の賊軍と戦ってこの地で殉死したとされる朱仁福を始遷祖としているが、それは明末以降に、この一族のものが、意図的に始遷祖を北宋末期まで遡及させる動きをした可能性があるのでは疑わしい。この点も含め、南潯鎮の朱氏一族については、須江隆(2002)の中で詳しく論じたことがあるので、本稿では、そこで述べなかった現地の建造物への貢献の足跡を中心とし、簡潔に言及しておくことにしたい。この点に関しては、朱氏一族にも華氏一族と同様の傾向を見ることができる。例えば、紹興21年(1151)の記銘がある「潯溪祇園寺莊田記」によれば、朱道寧(系譜ではこの人物との関係をつかめない)は祇園寺の維持のために、二人の子供に命じて田地20畝を寄付させたり、不作の年に穀物の供出を行ったりした<sup>9)</sup>。明代の万暦年間末期には、朱国禎が、祇園寺の重修と同寺院内にあった鉄製仏像の鑄造を実行したり、火災により焼失した報国寺の再建を行ったりしている。また彼は、董氏一族と共同で広惠宮(別名、張王廟)の重修もした<sup>10)</sup>。そして更には、丁度この頃、南潯鎮における朱氏のステータスの昂揚と一族の再編をはかるために、この一族

<朱氏系譜>



に属する誰かが、祖先を祀った祠堂「薦福祠」を土地に開かれた祠廟と位置づけ、南宋末期以来その土地の祠廟を朱氏一族が維持してきたかのように見せ掛ける碑文を作為した<sup>11)</sup>。

以上のように、華氏や朱氏は、祠廟・寺院・橋梁などの地元の建造物への介入・維持や財源面での貢献、人民の教化・指導によって、南潯鎮におけるリーダーとしての資格を、現地住民から付与されることになったのである。

## 2. 「鎮」の祠廟で祀られた神々の言説

前節では主として、南潯鎮の指導層が具体的にどのような人々であり、如何にしてリーダーとしての資格を付与されていったのかという点について考察を試みた。そこで次に本節では、彼らが形成しようとした「鎮」社会の自律的秩序とは、どのようなものであったのかを探ってみることにしたい。なおそれを解明するための手法としては、南宋時代の南潯鎮において、人々が集うコミュニケーションの場として、重要な機能を果たしていた「土地堂（後の嘉応廟）」に着目し、それに関する記録にみえる言説の分析を、主として行うこととする。

「鎮」社会におけるリーダーたちが積極的に介入し維持に貢献した祠廟では、その地域独自の伝承や説話に基づく神々にまつわる言説が形成され、それへの信仰が「鎮」社会の人々の文化的・精神的統一原理となっていた。南潯鎮において、とりわけ土地堂（後の嘉応廟）は、市場が開設されて交易が行われる場として、また集会活動の場としても機能していたので、多くの人民が集まり、その土地独特の信仰が共有されていた。その信仰の具体的表象は、次に示した土地堂で祀られる神々に関する言説に現れている。

飢饉に見舞われた宣和3年（1121）9月5日、崔姓と李姓の河南の米商人が、米や豆を商うために、船で南林村にやってくるまで停泊した。崔・李の二人の商人は、南林村の窮状を見て、米や豆を少しずつ分けて掛けで売ってあげた。その夜、米が尽きて帳簿が煩雑となり、

店主に顔を合わせがたくなってしまったため、二人はともに運河に身を投げて自殺してしまった。後に南林村民は、崔・李二人の米商人を記念して市中に土地堂を建て、像を造って祭祀し、二人が溺死した場所を「舎身潭」と名付けた。毎年9月5日になると、家々では米飯を炊いて供養するようになった。その日は、双土地誕生の日と称され、この行事は、南潯鎮の習俗となった<sup>12)</sup>。

まさしく、宋代以来、交通の要衝として栄え、行商人や坐商たちの拠点となっていた南潯鎮にふさわしい、その土地独自の神々の言説ということができよう。この言説は、解放後に林黎元なる人物によって編纂された地誌『南潯史略』の中に記されているものであるが、その内容からして、長年にわたり現地で口述・信仰されてきた民間伝承であることは推測に難くない。

ところで、南潯鎮の創設期である南宋時代においては、北宋末期の徽宗時代から盛んになった地域の祠廟への賜額・賜号が形式的に継続されていた。この政策はもともと、成熟しつつあった地域社会を中央政府が統制せざるを得なくなったために、地域の祠廟を中央で把握し、人々の心性までをも支配しようとしたものであった。しかし南宋期にはもはや、宋王朝は末期的症状を呈して、王朝の権威を象徴させるためだけの賜額・賜号を行い、地域の神々の威光を借りた統治を行おうとしていた。一方、地域社会に拠点をおくリーダーたちは、こうした宋王朝の現実的政策選択を歓迎し、体制教学を利用して賜額・賜号に備えて神々の表象をそれに沿うように改変していった<sup>13)</sup>。例えば、南宋末期の南潯鎮では、当時父老であった華元実が、先に述べた神々の言説を次のように改変している。

この地には、崔承事郎と李承事郎の二公が居住しておりました。彼らは、その心もちは仁に根ざし、ことを行うに当たっては義に基づいた決断をいたしました。宣和年間に方臘の賊軍が騒擾し、その噂に安吉州の人々が動揺すると、二公は郷の役人を率いて防衛に当たり、結局無事でした。あるいは、凶作や飢

饑饉の年には二公は競って倉にある穀物を放出し、被災者に施し与えたので、人々は皆、その行いを有り難く思いました。二公が亡くなると、居民は皆、その恩を感じて慕い、限りなくその恩義に報いようとして、祠廟を建てるのにふさわしい市中の土地を占い、祠宇を設けて二公をお祭りしました。土地の人々は、毎年一定の節日や朔日になると、廟神に飲食物を供えて祭祀し、雨天晴天続きの折、流行病が蔓延した折には必ず祈りを捧げ、廟神はいつもその要求に応じてくれました。神様が顕わされた現象が、いかに不思議なものであったのかについては、詳しく述べることはできないほどです<sup>14)</sup>。

ここでは、土地堂に神として祀られた米商が、具体的な官位をもつ郷紳にすり替えられ、しかも彼らは儒教の教えにかなった仁義に根ざした行いをしたために神として土地の人に崇められたことになっている。そして華元実は更に、土地堂の神々が顕した不思議な靈驗として、蝗を撃退したこと、早魃の発生時には飢民を庇護したこと、舟行の安全をはかってくれたこと、水路から来る盗賊を退散したことをあげつらい、土地堂への賜額の申請を行った。彼の申請は、神々の生前の仁義に根ざした行いに加え、南潯鎮で現実に起こった事柄を上手くアレンジし、農政・社会救済・治安維持といった宋王朝の地方統治理念にかなった具体的な靈驗に言及していたため、結局、咸淳6年(1270)12月に宋王朝から「嘉応廟」という廟額が下賜された。その経緯は、中央の儒家官僚によって「尚書省牒文」という行政文書形式の文書にまとめられ、その公文書が南潯鎮にもたらされると、その文書は石に刻まれて「嘉応廟勅牒碑」という碑目の碑記が立てられた。この碑文は、後掲の史料1を参照すれば明らかなように、賜額に至るまでの間、地方官庁と中央政府とが文書行政の遣り取りをした足跡を刻んだもので、祠廟の記録の中では、「廟牒」に分類されるものである。父老の華元実が宋王朝の体制教学に沿うように、民間伝承を改変したことは明らかであろう。また、その碑文には、この祠廟で祀られている神を土神と称している<sup>15)</sup>。

一方、朱氏一族にもまた、土地の神の靈驗を、王朝支配の体制教学に沿うように作為した痕跡を確認することができる。同治『南潯鎮志』巻26、碑刻2には、「薦福祠勅牒碑」なる碑目の碑文(後掲の史料2を参照)が嘗て南潯鎮に存在していたことを伝えている。しかしこの碑文は、須江隆(2002)で緻密に分析したところによると、明末から清初に至るまでの間に、朱氏一族の誰かが「嘉応廟勅牒碑」の文面を模倣して作為したものであることが明らかとなっている。この作為された碑文の中では、薦福祠で祀られている神(朱氏一族の始遷祖:朱仁福)は、南潯鎮の土神と規定され、「飢饉に際して穀物を供出して人民を救い、盗賊を捕らえるのに功績があったという靈驗の実績」が言及されている。朱氏一族によって、社会救済や治安維持に関する靈驗を顕す土地の神が作為され、薦福祠を土地の人々に開かれた祠廟と位置づけようとする動きがあったことが確認できる。これは明末清初の事例であるが、南宋時代の華氏の事例と通底するところがあることからすれば、地域のリーダーたちによる、土地の神々に関する言説の改変・作為という現象は、近世期の「鎮」社会にみられる一つの特徴ともいえるのではなからうか。

筆者はこれまでの研究で、宋代の郷鎮社会に存在した多くの祠廟にまつわる神々の言説や、賜額・賜号の経緯が刻まれた碑文の分析をしてきた。それを通して、史料系統の異なる二つの祠廟の記録(「廟牒」と「廟記」)があることを見だし、郷鎮社会で形成された地域独特の神々の言説がある一方で、そのリーダーや地方官たちによって、賜額・賜号に備えて儒教理念に合致するように改変乃至は作為された神々の表象が別に存在することをいくつか確認した<sup>16)</sup>。またあわせて、これらの神々が、宋王朝によって土神と規定されていることも明らかとなった<sup>17)</sup>。南宋時代においては、すでに「鎮」社会のレベルでも、かなり豊かな様々な言説や信仰が形成されていた。それらは、土地の人々によるものもあれば、現地に貢献した儒教的教養を身につけたリーダーたちによって改変乃至は作為されたものもあった。これらの言説・信仰が、市場・交易の場として、そして広くコミュ

ニケーションの場として機能していた祠廟を舞台に語られることで、「鎮」社会の人々は精神的・文化的にも結びつきあっていたのである。またリーダーたちによって神々の言説が王朝支配の意向に沿うように改変乃至は作為されていたこと自体は、それだけ儒教が浸透していたことを意味している。こうした神々の生前の行いや神となってから顕した靈驗に関する言説が、地域のリーダーたちによって、人民への教化のために語られることがあったとしたならば（あるいは賜額・賜号に関与したことを、地域のリーダーたちが自らアピールするためにということもあったであろう）、儒教の教えは祠廟を舞台として益々浸透し、「鎮」社会の中に、自ずとそれに基づく、日常生活を規律する倫理的秩序も形成されたのではないだろうか。

## おわりに

宋代における開封府・臨安府といった首都の繁栄ぶりや、そこでの成熟した文化については、言葉で言い表せないほどのものがあつた。特に北宋末期の徽宗時代以降については、その傾向が顕著であつたことが最近指摘されている<sup>18)</sup>。しかし一方で、本稿での考察からも明らかのように、地方の「鎮」においても、人民たちは、精神的にかなり豊かな伝承や信仰を共有していた。また同時に、「鎮」社会に様々な形で貢献することによって、リーダーとしての資格を人民たちから付与された指導層も、それらを利用するかのようにして、祠廟で祀られる神々の表象を改変・作為し、人民の教化を通じて自律的な秩序を形成しようとしていた。当該期以降の地域社会は、社会的にも文化的にもかなりの成熟度を益しつつあつたのである。

筆者は嘗て、地方志の編纂事業と祠廟制との展開の関係を明らかにすることで、北宋末期以降ぐらいから、中央の儒家官僚たちの視点が地方へと、そして地域の宗教社会へと注がれていったことを指摘し、徽宗時代が“地方の時代”へ重点が移行する変質期であると述べたことがある<sup>19)</sup>。本稿で取り上げた江南における地域社会、とりわけ「鎮」社会の成長が、北宋末期か

ら後の元明時代へと、その特色をどのように展開していくのか、あるいは近世期ということで一括りにできる「鎮」社会の特質を見いだし得るのかどうかといった点については、さらなる考察が必要であるが、江南政権の誕生という点をも視野に入れて、今後の課題として考えていきたい。

## 注

1. 斯波義信（2002）を参照。
2. 許金海（2001）を参照。
3. 同治『南潯鎮志』巻25，碑刻1に所収。
4. 同治『南潯鎮志』巻12，人物1の華文勝伝を参照。
5. 平田茂樹（1997）を参照。
6. 嘉熙元年2月の記銘がある「報国寺布施記碑陰」に刻された「檀越施財置田名銜」及び「檀越施財修崇名銜」（同治『南潯鎮志』巻26，碑刻2）を参照。
7. 土地堂に「嘉熙」の廟額が下賜された経緯と華元実との関わりについては、須江隆（2001b）を参照。
8. このエピソードは、『宋史』巻474，姦臣伝，賈似道の条，及び同治『南潯鎮志』巻12，人物1の華文勝伝に付随する華元実伝を参照。
9. 同治『南潯鎮志』巻25，碑刻1を参照。
10. 同治『南潯鎮志』巻8，寺廟1を参照。
11. 須江隆（2002）を参照。
12. 許金海（2001）に引く、林黎元『南潯史略』の記述を参照。
13. 宋王朝による祠廟制の展開については、須江隆（1994，2001a，2003a，2004a），及びSUE Takashi（2003b，2003c）などを参照。
14. 『吳興金石録』巻12に所収の「嘉熙廟勅牒碑」を参照。
15. 南潯鎮の土地堂に「嘉熙廟」の廟額が下賜された経緯を記す碑文については、須江隆（2001b）で詳しく分析をした。
16. 須江隆（1998，2000b），及びSUE Takashi（2000a）を参照。
17. 須江隆（2001b）を参照。
18. 例えば、伊原弘，他（2004）を参照。
19. 須江隆（2003d，2004b）を参照。



参考文献

- 伊原 弘, 他 (2004) 『特集「徽宗とその時代」』  
アジア遊学第64号, 勉誠出版
- 斯波義信 (2002) 『中国都市史』東洋叢書9, 東  
京大学出版会
- 陣内秀信, 他 (1993) 『中国の水郷都市—蘇州  
と周辺の水の文化』鹿島出版社
- 高村雅彦 (2000) 『中国の都市空間を読む』世  
界史リブレット8, 山川出版社
- 平田茂樹 (1997) 『科挙と官僚制』世界史リブ  
レット9, 山川出版社
- 許 金海 (2001) 『水郷文化古鎮—南潯』南潯  
文化叢書, 当代中国出版社
- 李 海平 (2001) 『南潯』古呉軒出版社
- 浙江省第一測絵院 (2000) 『江南名鎮南潯交通  
旅游図』湖南地図出版社
- 須江 隆 (1994) 「唐宋期における祠廟の廟  
額・封号の下賜について」(『中国—社会と文  
化』9)
- 須江 隆 (1998) 「福建莆田の方氏と祥応廟」  
(宋代史研究会編『宋代社会のネットワーク』  
〈宋代史研究会研究報告第六集〉汲古書院)
- SUE Takashi (2000a) “What Do Inscriptions  
Tell Us?: The Discourse Found in the  
Records of Temples.” In The Research  
Group of Historical Materials in Song  
China, ed. *The Study Of Song History From  
The Perspective Of Historical Materials*
- 須江 隆 (2000b) 「宋代における祠廟の記録—  
「方臘の乱」に関する言説を中心に—」(『歴  
史』95)
- 須江 隆 (2001a) 「熙寧七年の詔—北宋神宗朝  
期の賜額・賜号—」(『東北大学東洋史論集』  
8)
- 須江 隆 (2001b) 「祠廟の記録が語る「地域」  
観」(宋代史研究会編『宋代人の認識—相互性  
と日常空間』〈宋代史研究会研究報告第七集〉  
汲古書院)
- 須江 隆 (2002) 「作為された碑文—南宋末期  
に刻まれたとされる二つの祠廟の記録—」  
(『史学研究』236)
- 須江 隆 (2003a) 「唐宋期における社会構造の

変質過程—祠廟制の推移を中心として—」  
(『東北大学東洋史論集』9)

- SUE Takashi (2003b) “The Shock of the Year  
Hsuan-ho 2: The Abrupt Change in the  
Granting of Plaques and Titles during  
Hui-tsung's Reign.” *ACTA ASIATICA*  
*vol.84.*
- SUE Takashi (2003c) “Structures of regional  
society and multiple discourses as revealed  
in the records of ritual halls and temples”  
In ICHIKI Tsuyuhiko, HAYASAKA Toshihiro,  
IHARA Hiroshi, and SUE Takashi, ed.  
*‘Interactions and Daily Life: Signs of  
Changes in the Song Society’*
- 須江 隆 (2003d) 「地域社会へのまなざし—祠  
廟制の新局面—」(東方学会発行『「唐宋変革」  
論を考える』〈第53回東方学会全国会員総会  
シンポジウム I 発表論文集〉)
- 須江 隆 (2004a) 「徽宗時代の再検討—祠廟の  
記録が語る社会構造—」(『人間科学研究』創  
刊号)
- 須江 隆 (2004b) 「地方の時代—地域社会への  
視点—」(『アジア遊学』第64号・特集「徽宗  
とその時代」, 勉誠出版)
- SUE Takashi (2004c) “Order in Zhen  
(township) Society: Temples and Local  
Elite” *‘Chinese Society and its Significance  
after the Tang-Song Reformation: with  
focus on the civil service examination,  
urbanization, and lineage systems’*

[附記1]

本稿は、2003年12月に大阪市立大学で開催され  
た、COEプログラム「都市文化創造のための人  
文科学的研究」A チーム(比較都市文化史)第  
15回研究会において、「祠廟の記録に見える近  
世中国の「鎮」社会—南潯鎮の事例を中心に—」  
という論題で公表した口頭発表用原稿及びレ  
ジュメ、及び2004年8月にモスクワで開催され  
た第37回国際アジア・北アフリカ研究会議(通  
称 ICANAS)において公にした SUE Takashi  
(2004c) を改編の上、加筆したものである。

[附記2]

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「宋代以降の中国における集団とコミュニケーション」(研究代表者：広島大学・岡元司，課題番号10290777)，及び同基盤研究(C)(2)「祠廟の記録を主史料とした唐中期～南宋期の王朝権力と地域社会の連関構造に関する研究」(研究代表者：須江隆，課題番号14510392)による研究成果の一部である。

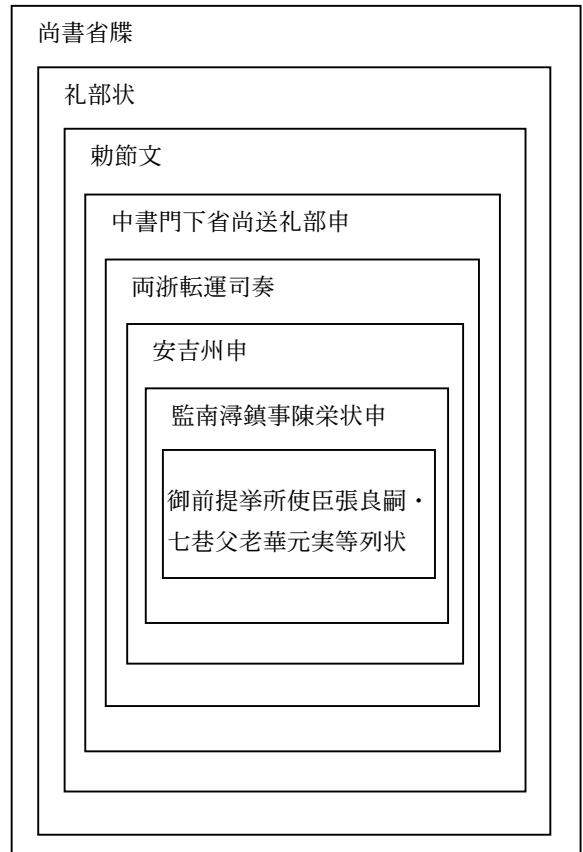
史料1：「嘉応廟勅牒碑」とその文書構成

勅賜嘉応之廟

尚書省牒 七巷社首□□

礼部状「準咸淳六年正月二十七日勅節文『中書門下省尚送礼部申【兩浙運司奏〔本司拋安吉州申《拋承節郎・監安吉州南潯鎮事陳榮狀申（拋御前提挙所使臣張良嗣并七巷父老華元実等列状（世居烏程県震沢郷之南林，故老相伝，此地有崔承事・李承事二公居焉。其存心也根於仁，其处事也勇於義。宣和間，方寇擾攘，声揺郷郡，二公率郷丁捍禦，果獲全安。或值凶年飢歳，争出廩粟以賑給，人皆徳之。暨二公卒，莫不銜恩思慕，自以為報之罔極，乃卜地於市中，設祠宇而並祭之。衣冠服飾，効郷党護境二神貌像，七社人煙，歳時節朔，以饗以祀，雨暘必祈，疾疫必禱，所求輒応，顯異莫能具述。嘉定乙亥，飛蝗蔽天，郷民羅拜於廟，或泣或訴。越翌日，忽疾風起於庭下，蝗之避去者幾半，余悉自斃。是歳乃亦有秋，咸竭力奉事，廟貌一新，酬答神貺。嘉熙庚子，旱荒，飢莩枕藉于兩廡，頗覺穢褻，香火僧厭而禱之。是夜神告之曰，窮民無歸，居我廊宇，以避風雨。我若譴怒，彼將疇依。於此尤見其根心之仁，愈無窮已也。淳祐壬寅，待制趙伉夫道經南潯，偶值雷雨暴作，湍流奔湧，舟不能前。趙公驚怖，左右謂，此地有神曰崔・李二王，祈之無不驗。遂默禱之，俄頃帖然舟獲到岸。而謁於祠下致謝，畢見其廟未有額，慨然書之。今猶存也。宝祐甲寅，狄浦塩寇嘯聚，村落多被其害。且垂涎南潯，以為市井繁阜・商賈輻湊之所，意在剽掠。妄求懇禱，所抽十余籤，所擲十余琰，皆不協吉。群盜相顧，愕然輒逞兇暴，欲拳二像棄之於水，似覺拘攣而掣其肘，乃畏懼潜遁。景定辛酉，水災比近，

頑徒有鼓衆借糧者，市戸焚香禱告，忽一日，群兇駕舟圍繞，未幾随散。或問之曰，倏来而倏去，何也。賊応之曰，昨夜南潯之南有二人若神，身長丈余，立於人間屋上，諭我等，踰月方許汝来此也。今且退去，一月後復来。聞者喜懼相半，不十日，即就擒戮。此二項益見神之顯異垂庇，每惓惓於艱難危急之時，殆二天也。人之還以答神休，豈不能伸一喙耶。恭惟国朝愛民如子，凡神之有恵於民者，必載於祀典，蓋敬神所以愛民口。如徳清之新市，亦隸本州管下，其鎮土神，嘗有恩封廟額。独南潯未嘗举行，允為欠典。未創鎮以前，特郷村爾，無階可陳。今創鎮幾二十載，前後鎮官歳時祈禱屢驗，僧徒晨夕焚修愈勤，此廟正係祝聖祈禱去処。茲遇聖天子初登大宝，増崇祀典，恩霈方新，良嗣等謹述家伝・人誦之実跡，列状乞備申施行。本鎮保明詣実，申州乞施行。州司所拋承節郎・監安吉州南潯鎮事陳榮申到土神靈跡因依，本州保明是実，申本司乞施行。』本司已照例差官，詢究覈実，委有靈跡，保明是実，伏候勅旨。』本部照条勘当，具申朝廷，準批；送下寺擬封申。除已連送太常寺，擬封去後。拋本寺回申，安吉州南潯鎮土神崔・李



二承事擬封二字廟額，今欲擬嘉応廟為額，合行降勅，申乞施行。本部備申朝廷，伏候旨揮。】  
 □□二十五日，奉聖旨；依奉勅如右。牒到奉行。前批，三月空日空時付礼部施行，仍関合属去処。』本部開具前銜後擬下項，伏乞朝廷給降勅牒施行，伏候旨揮。」

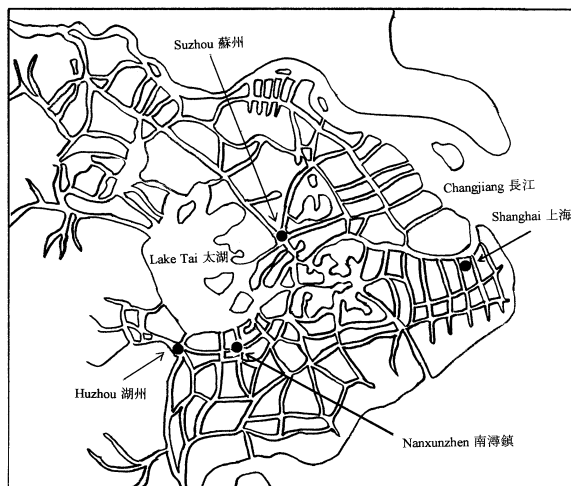
牒奉勅；宜賜嘉応廟為額。牒至準勅。故牒。  
 咸淳六年十二月□日牒（『吳興金石錄』卷12）

史料 2：「薦福祠勅牒碑」

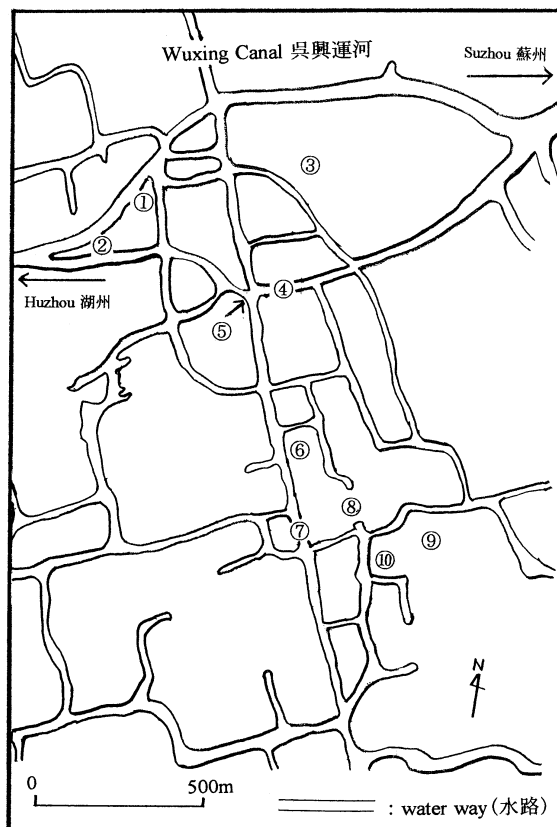
「薦福祠勅牒碑」

礼部状，准德祐元年四月十六日勅命交，中書門下省臣送礼部申，兩浙運司，安吉州，拋承節郎・監安吉州南潯鎮事陳榮状申，御前提举所使臣等張良嗣并烏程县震沢郷南林七巷社民華元升等称，枢密使童貫同從事朱仁福征収方臘有功，捐軀殉難，蒙聖恩，遣侍郎劉珪追封南林侯。中書許將卜地，造塋于南潯鎮西嘗字四圀石街大巷明月橋北，在于宣和二年三月一日。拋長孫男朱柁係淳祐進士，次孫男朱林係郷進士，共同建祠于淳祐癸卯五年二月，增修于咸淳己巳，以傍二親之墓送司印押，使子孫世守，不啻朱氏永祀，即江南七社人煙，無不仰賴拯救之恩，迄茲男婦到祠，依時祭享。今祠雖建，尚未請額。幸遇聖天子初登大宝，追崇祀典，恩沛方新。今南潯鎮係本州管下，良嗣等謹述朱從事官仁福出粟救民・獲寇有功顯靈實蹟，列状乞備申施行。本鎮保明是實，申本司，照例差官，從公踏勘，詢究覈實，委有朱從事官仁福救民獲寇功績，保明是實，伏候勅旨。奉部照例条勘当，具申朝廷，准批；送下等擬封申。除已連送太常寺，擬封後。拋安吉州南潯鎮土神朱仁福擬封薦福祠三字，給扁為額，合行降勅，申施行。本部備申朝廷，伏候旨擬。六月二十六日，奉聖旨；依奉勅如。牒到奉行。前批，三月空日空時付礼部施行，仍関合属去処。本部開具前銜後擬下項，伏乞朝廷給降勅牒施行，伏候旨揮。

大宋德祐元年十二月望日，七巷社民華元升等同太学生朱芾・守祠生朱藻鈔録，勒石于薦福祠前門左壁。（同治『南潯鎮志』卷26，碑刻2）



地図 1：「太湖周辺の水路略図」



地図 2：「南潯鎮内部略図」

- ① Zhujia Tomb 朱家墳
- ② Qiyuan Monastery 祇園寺
- ③ Baijianlou 百間樓
- ④ Tomgjin Bridge 通津橋
- ⑤ Shizi Harbor 十字港
- ⑥ Guanghui Temple 広恵宮(Zhangwang Temple 張王廟)
- ⑦ Huajia Bridge 華家橋(Tongi Bridge 通利橋)
- ⑧ Jiaying Temple 嘉応廟(Tudi Hall 土地堂)
- ⑨ Baoguo Monastery 報国寺
- ⑩ Huajia Lane 華家兜(巷)

# Zhen(鎮) Society in Premodern China as Revealed in the Records of Temples: Nanxun 南潯 zhen in the Southern Song 宋 Period

Takashi SUE

When people gather together to create places to live, be they large cities or rural hamlets, some sort of order is essential. A major distinguishing feature of Chinese society since the Song period has been that not only have regional towns (zhen), or spontaneously formed settlements and rural townships that evolved at strategic points in the traffic network, developed to a remarkable degree with advancing urbanization, but in addition Confucianist ideology was reinforced and penetrated to the innermost parts of local society, and candidates for the civil service examinations, degree holders, and former officials who had returned home on retirement came to be recognized as leaders of local society. This raises the question of what sort of autonomous order these leaders of local society attempted to establish in zhen society during the Song period, which marked the emergence of these new social phenomena.

In this paper I shall focus primarily on ancestral temples, which in premodern China were the most immediate focal point of the local inhabitants' beliefs and played a crucial role in the formation of identity in community cohesion, and by analyzing the relevant sources, chiefly inscriptions, I hope to shed light on order in zhen society as seen from temples. Since it is impossible to deal with all zhen in this paper, I shall concentrate in particular on the formative period of Nanxun zhen, a typical early zhen in an advanced region that still exists and has its roots in the Southern Song period.

Keywords : Zhen Society, Local Elites, Order, the Records of Temples,  
premodern China